



2017年7月15日 発行

2017年夏号

<第39号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/池田直樹 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881

— 特 集 —

## 短期入所「灯」

—「今」と「これから」の生活を考える—

ぼうしんゴムの山田

私は和ではたらいしています。たくさんのぼうしんゴムがあり、小さいネジを4個きかいてつけて、それでかんりよう。はいたつのたづみさんが、木曜日にもってくるので、一番この作業が多い事と、ユリアネジの6個のさぎようがいつもある時とない時があるけど、だれもできないのでしょくいんにまかせられているんです。ユリアネジやぼうしんゴムをやり終えたら自分できにおちつく。これをやりつづけると、目が、ぼーとします。目がつかれるけどもがんばり続ける！

ダンスについては、「夜空の向こう」「トラブルメーカー」「はまだばむゆばむゆ」をやっています。とてもみんながおいつかないし、私のダンスは先生しかうまくおどれないとじぶんでは思っています。ちよつとこのおどりにかんしてはむずかしいと思います。

山田 美恵

## —「今」と「これから」の生活を考える—

今年度、短期入所灯では、短期入所を利用している利用者さん・保護者さんと面談を行い、現在の生活について、そして、利用者さんの将来の生活について話をする場をもつていこうと考えています。

灯では、「グループホーム(以下、GH)の前段階

として」短期入所の利用を勧めてきた経緯がありました。しかし、GHへ移行する方は少数で、自宅と灯の両方の生活をそれぞれ楽しんでいられる方が多いようです。

それとも一つの生活の形であると思いますが、今から5年先、10年先を見据えていく中では、これまでとは少し違った動きも必要な時期に来ているのかもしれない。

今までは、利用者さんや保護者さんからの希望が出なければ、職員からGHへの入居を勧めることは、あまり取り組んでいませんでした。

しかしながら、我々と同じく利用者さんも毎年1

つずつ歳をとります。今後は自宅での生活が徐々に難しくなってくる方や、家庭の事情などによりGHの利用を希望する方もまた増えてくるのだらうと思います。

灯の職員として、利用者さんを見る中で思うのは、「短期入所は、やっぱり短期入所ではない」ということです。

というのは、自宅以外で寝泊まりする環境に慣れることは大事だと思いますが、短期入所では宿泊にきているとはいえ拠点は自宅なので、利用者さんも何かあれば保護者さんを頼り、職員が利用者さんのキーマンと

しての役割を担うまでにはなりません。

GHに入るのであれば、生活習慣や金銭管理など、これからの生活に必要なことを職員と一緒に考えられますが、短期入所ではそこまで踏み込めないことが多いというのが実感です。

Aさんは「将来一人暮らしがしたい」と考えています。お母様は心配で、Aさんの気持ちは理解しながらも、具体的な話は先延ばしにしてきました。しかし、自分の年齢などのことも考えて、「50歳になったら一人暮らしをしよう」とAさんに伝え、お母様としても

覚悟を決めたようでした。

GHの生活は、自分で出来ることは自分ですること、G Hの生活は、自分が前提です。もちろん、出来ない部分は支援者が手伝いますが、出来ることに限しては、支援者からの声かけを待つのではなく自ら動き、「好きな時間に食事やお風呂に入る」ことや「ドライヤーの扱いも自分でやってみる」など、小さな決断と行動を重ねて「自分の生活」を創っていくことが大切だと考えています。

それをお母様に「理解、ご協力いただき、「本人から一歩引いて見守り、寄り添いながらも、自分で出来ることが増えるように」と考えていけるようになったことは、Aさんの将来に繋がると、とても大きな変化だったと感じています。

このように、保護者さんと意識を合わせて、一緒に利用者さんに向き合えることは、支援者としても心強く、利用者さんにとっても

不要な混乱が最小限に抑えられる要素だと思います。

そうして、ゆくゆくは家を出て、支援者の手を借りて生活することになった際にも、支援のポイントを理解した上で日々の支援に活かすことが出来、それが利用者さんの安心感にも繋がっていくと考えています。

ワークスユニオンの生活支援の考え方は、「地域での生活に不安があっても、「自分なりに生きてみたい」と思う人たちの生活を見守り、支える」ことです。「その人にとって本当に必要な支援は？ 生活の中でしたいこと、譲れないことは？」

「今」の生活を模索する過程を通して、一人ひとりの利用者さんの将来の生活をイメージし、生活の課題を整理する。それが、それぞれの利用者さんの来たる日に向けて、灯職員として今やるべきことかなと思います。

(原)



## 年間ケース「何故を問う」

## 取り組みについて

機関紙第38号の「窓際おじさんのつぶやき」で取り上げていた総括会議のケース検討について、生活支援・日中支援が共同で取り組んだ内容をご紹介します。

## 【生活支援部】

Bさんは、これまでの生活歴も関係し、早朝覚醒し、不安を感じてしまう。また、感情を言葉で伝えることが難しく、支援者の対応によっては暴力行為に至ることがある。また、実家では快便だが、ユニオンでは便秘気味となり、自然排便が難しい。そのため、これらの原因を問い、「生活リズムを整えると、安定した暮らしに繋がるのではないかと」の視点で支援を検討した。

まず、睡眠については、昼夜逆転が見られ、医師と協力し、眠前薬の量を調整するなど試みたが、残薬で覚醒時にふらつくなど、副作用が出た。そのため、服薬量は最低限にして、支援体制を再構築。深夜も常時

傍で支援者が待機し、ご本人が安心できる体制を整えた。その結果、徐々に昼夜逆転も解消されつつある。

暴力行為は、ご本人と暴力を受けた支援者の関係を見て、「行き過ぎた支援や言葉かけが原因ではないか？」と仮説を立て、支援者と振り返りを行うことにした。排便については、帰省時は自然排便ができており、その違いを検討したところ「水分摂取量」の違いに気が付いた。以前、水分の過摂取で体調を崩しかけたことがある。支援者の不安から水分量を制限した経緯がある。しかし、これが原因で自然排便が遠のいていると考え、満足できる水分を摂取してもらおう取り組みを変化させると、自然排便の回

数が増えはじめた。

今回、何故を問う中で、支援者の方針と、ご本人の希望に乖離があり、無意識のうちに支援者主体の支援を組み立てていた。そのため、ご本人の要求に答えられず、不安を感じ、結果として暴力行為に繋がるのではないかと結論づけた。

今回の取り組みでは、すべての支援者と一緒に「支援の基本」を再考する良い機会となった。また、始まったばかりで課題は山積しているが、今後も合同ケース会議等で助言をもらいながら、チームの支援力を高めていきたい。

(高橋)

## 【日中支援部】

日中では「何故事業所内のトイレと玄関を往復するのかわ」ということを追ってきた。往復行動に対して、始めは制止をする方法を行ったが制止をされると、支援者を叩くことが見られ、

行動が見られたときは見守る体制に変更した。それと同時に行動が出る理由の仮説を考えた。

往復行動の制止をやめると、叩く行為はなくなり、見守る中で時計をちらちら見る、汗を大量にかく、飲み物を頻りに摂取することが分かった。また、保護者に行動の見解や、Bさんの既往歴や職歴などの情報共有の協力をして頂いた。これらの情報からトイレで便を出したいが出せないもどかしさ、始めての場所での不安、理解してくれない人がいると考えた。

今回の支援から、本人の行動が出たときに対応するのではなく、一歩引いて状況を考え、行動がでる理由を考察し、本人にあった環境に一つ一つ整えていくことが支援なのだと思いついた。支援者がBさんに寄り添い、不安などを軽減でき

たことで往復行動は軽減されたと考え、まだ続いている現状があり、これからもその「何故」を一歩引いた姿勢で見守り寄り添った支援を考えていきたい。

今回、同じ利用者さんの「何故」を生活と日中事業所で追い、情報を共有することで、利用者さんへの支援に新たな視点が生まれた。

結果的に利用者さんに合った支援を提供でき、それぞれの事業所で落ち着いて過ごせる日も増えてきた。チームで考えることで、利用者さんの環境の整理ができ、それぞれに合った支援を考え、アプローチしていきたい、利用者さんの「何故」について応えることが出来た部分もあると感じた。ただ、残っている課題も多々あり、これからは今回学んだことを活かして、チームで利用者さん一人ひとりに寄り添い、それぞれに合ったより良い支援を提供していきたい。

(川口)





今年になってワークスユニオンでは、訃報が続いている。

私の父も3月に亡くなったのだが、90才を越える年齢だったので、父の場合は「お疲れさん。よく頑張ったね。」との思いしかない。

しかし、まだまだ若い保護者や利用者の死に直面すると、「ご本人の遣り残したこと。」「将来への夢。」などを考えるとやるせない気持ちで、ただただご冥福をお祈りすることしかできない。

利用者の保護者で、後援会や法人の役員も引き受け、世話人としてメゾンの食事作りも担ってくれていた「秋本恵子」さんもその一人だ。

数年前から、癌と戦いな

がら、頑張ってくれていたのだが、昨年になってご主人にも癌が見つかった。ご主人の癌の進行は早く今年になって直ぐ先立たれた。

本人の体調も思わしくはなかったのだが、「ご主人の四十九日の法要と納骨を済ますまでは、家を空けるわけにはいかない。」と入院を拒み、家で頑張り続けた無理がたたったのか、入院後も病状の悪化は止まらず、4月を迎えて直ぐ、旅立たれた。

お通夜や告別式に、たくさんの皆様にご参列いただいたことに、「秋本家」に代わり御礼申し上げます。

秋本さんあなたがいつも心配されていたご次男の今後の生活は、ご長男さんと相談しながら、私たちワークスユニオンが責任を持って支え続けますので、ご安心下さい。天国からご主人と共に、お見守り下さい。

職員紹介

増田 義之 (を) OMC

今年度からOMCの責任者を担当し、企業内で利用者さんと一緒に頑張っています。

前職は、アパレル関係の店舗管理者として、海外に何度も商品の仕入れに行っており、忙しく仕事に追われる毎日だった様です。

前職の時から、障がい者支援に対して興味があり、ようやく念願かなって一昨年にワークスユニオンに入職となりました。支援を通して、利用者さんと一緒に成長して行きたいと、彼は

話します。

休日は、子どもと一緒にUSJやアウトドアへ出かけて、楽しんでる優しいお父さんです。

川端 隆太 (を) ワークス甲

ワークス翔では清掃班を担当し、利用者さんと一緒に青い制服姿で作業場所に向かいます。2年目を迎え、気持ちに余裕が出来て、支援が楽しいこの頃です。

以前は陸上自衛隊で6年の任期を務めました。東日本大震災の災害地派遣で、被災地を目の当たりにしたことが強く印象に残っています。その後、勤めた児童デイでは、子供の成長を感じる事が喜びでした。現在は、利用者さんの言葉の裏にある本当の気持ちを汲み取ることに、支援の難しさややりがいを感じています。趣味として、週2回エイサー(琉球太鼓)を練習しています。今秋、大正区で演舞する機会があるそうです。(横田・野崎)

編集後記

▼私の17歳の息子は小さい時から、「あせる」とか「慌てる」「緊張する」事を知らないのではと思うほど、マイペースでのんびりしています。▼いつも朝玄関で一緒にになると、だいたい駅の駐輪場から出てくる息子とすれ違いますが。▼その朝は、パジャマ姿だった息子を横目で見ながら出勤し、いつもの経路を使い駅のホームに下りると、ちゃんと制服を着た息子がいました。▼ついさっきパジャマだったよね?他人の空似?軽い目眩を起こす程の驚きを受けながら出勤しました。▼いつものんびりしている息子がこんな早業を身に付けていたなんて、これも成長の一つと受け止めておこう。▼直接支援に関わっていないので、客観的に現場を見ていると、各支援者のいろいろな工夫や葛藤に、感心したり驚かされたりしています。(S)